

第5章 トナカイ利用について

トナカイは、高緯度地域に暮らす人々にとって、旧石器時代以来、もっともよく利用された動物の一つである。これはトナカイが食料資源としてだけでなく、その毛皮（皮）が衣類や天幕、敷物などに加工され、角や骨が道具素材となるなど、体のあらゆる部分が多様な使途で利用し得たことによる。また、トナカイは、上記の有用性に加え、草や地衣類を主食とする食性、温和な性質、耐寒性など、高緯度地域における飼養に適した生物特性を具えていたことから、家畜化が試みられ、ある段階から荷駄引き用や騎乗用としても利用されるようになった。

トナカイ飼養民としては、スカンディナヴィア半島北部に暮らすラップが著名だが、北東アジアでも、民族誌時代には、その広大な地域の多くでトナカイが飼養され、人間や物の運搬や食料資源としての役割を担っていたことが知られる（レーヴィン 1960、佐々木 1991 ほか）。サハリンでも、北部から中部に居住するウィルタ（「トナカイの人」の意）がトナカイ飼養や狩猟、漁撈によって生計を立てており、民族資料の中には、トナカイの毛皮（皮）を素材とした製品（ウィルタ協会資料館運営委員会編 2002）や騎乗用のトナカイを刺繍したラグ（図 46）など、トナカイとの関わりの深さを示す資料が多い。

サハリンでのトナカイの生息数や生息場所の詳細は定かでないが、1942 年に出版された書物（岡田 1942）の中には、冬に数千頭にも及ぶ野生トナカイがサハリン南部に集い、春の訪れとともに北の樺太山脈へと戻る様子が記されている。また、飼養トナカイについてまとめられた 1940 年の書物（廣瀬 1940）には、飼養しているトナカイが蚊にたかられないように木を燻したことや、種雄以外の全ての雄に対して去勢を行ったことなどが詳細に描かれている。

北東アジアにおける民族誌時代のトナカイ飼養の盛行については上述したとおりであるが、本研究の対象地域であるサハリンと北海道において、考古資料に基づくトナカイの利用内容の復元は、飼養の有無の検討を含めて、ほとんどなされていないのが実状である。そのため、本章では、トナカイの遺存体とそれらを素材とした製品、トナカイを模した動物意匠遺物の集成に基づく利用内容の時代的変遷と地域差について明らかにすることを試みることにする。

第1節 トナカイについて

トナカイ (*Rangifer tarandus*) は分類学上、偶蹄目（ウシ目）シカ科トナカイ属に属する。トナカイは、主にユーラシア大陸に棲むツンドラトナカイと北米大陸に棲むシンリントナカイ（カリブー）とに分けられているが、種や亜種の設定については、いまだ統一し

た見解が得られていない(井上 1981)。野生のトナカイは、本研究の対象地域の中では、サハリンにのみ生息しており(廣瀬 1940、岡田 1942)、北海道では確認されていない。

トナカイの行動圏は広く、母子が出産後の2、3日の間、一定の狭い行動圏の中で生活する以外は、移動しながら暮らすのが常である。夏前には北に向かい、冬前には南に向かうというトナカイの季節的移動は、一見単純で分かりやすい法則に従っているようであるが、実際は見かけほど単純なものではなく、その道筋は不規則で予測し難いという(シートン前掲書)。南に移動する群れは雄、雌、仔からなる大集団であり、時には、その数が数百万頭に上ることもある。

トナカイは、シカ科の中で唯一、雌雄ともに複雑に枝分かれした筈状の枝角を持つ種である(シートン 1998 [1925-1928])。トナカイの枝角は、シカ科の中でも際立って発達しており、雄では長さが150cm程にもなる。枝角は毎年生えかわるが、そのサイクルは雌雄で異なることが知られており、雄では繁殖期後の冬に落角し、春の初めに新しい角が形成され始め、秋になると硬くなる。一方、雌の角は出産後の春に落ち、すぐに新しい角が生え始め、晩秋の発情期までには硬くなるという(シートン 1998 [1925-1928]) (表 26)。角の生え始めは、「袋角」と呼ばれるうっすらと毛の生えた柔らかい状態をしている。これはトナカイを利用する民にとっての重要な食糧資源になるだけでなく、現在では漢方薬の鹿茸(ろくじ)の原料として高値で取引され、現金収入を得る手段にもなっている(高倉 1997)。

高緯度地域に多く棲むトナカイは、シカ科の中でもっとも寒冷地適応を果たした種であり、鼻先を含めた体全体が長さ5~6cm程の体毛で覆われている。トナカイの毛皮は密生している上に軽く、冬の衣類に適した材料となる。良質な毛皮を採取する時期としては、毛が長くなりすぎ、もろくなる前の8月か9月が最適であるとされる(シートン 1998 [1925-1928])。冬には蹄の間にも長い毛が生える。また、足はやわらかい雪上を歩くことができるように幅広く、固まった深い雪の中から食べ物を掘り起こせるように縁が鋭くなっている(エスプマルク 1987)。トナカイの食料は、夏は草、冬は地衣類という生息場所に豊富にある植物を主体としている。

トナカイは体高が1mを超える大型の動物であるため、肉量が多く、味も季節さえはずさなければシカ肉よりも優れているとされる(シートン 1998 [1925-1928])。中でも、背中から尻にかけて数cmの厚さで広がっている脂肪層は貴重で、残りの部分全てよりも高値で取引されることがあるという(シートン 1998 [1925-1928] 前掲書)。この脂肪層は、雄では発情期の初めにもっとも厚くなり、雌では冬の間蓄えられるが、仔を産むとまもなく消費される。

トナカイの骨格は、基本的には、図4に示した各部位から成り立っている。頭蓋骨は複数の骨で構成されており、成長とともに一部の骨が癒合する(図5)。下顎骨は左右一対の骨であり、成長しても左右の下顎は癒合しない。

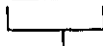
トナカイの歯は、乳歯から永久歯へと一度生えかわる二生歯性である(後藤・大泰司 1986)。



図 46 騎乗用トナカイを刺繍したウィルタのラグ (筆者所有)
類似品は Сахалинский областной художественный музей (2000) にも掲載されている

表26 トナカイにおける枝角の成長サイクル (シートン1925-1928 [1998] を基に作成)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12 (月)
雄					袋角					枯角		落角
雌	枯角			落角	袋角					枯角		


 サハ共和国で、鹿茸(ろくじ)の原料となる袋角を採取する時期
 (5月下旬~6月中) (高倉1997より)

本研究では、乳歯のみが萌出している個体を「幼獣」、永久歯が萌出し始め、歯根形成が完了するまでの個体を「亜成獣」、歯根形成が全て完了した個体を「成獣」として区別することとする。

前肢骨には、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨の他、指骨である基節、中節骨、末節骨などが含まれる。一方、後肢骨には、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨の他、趾骨である基節骨、中節骨、末節骨などが含まれる。食肉目などの雄に見られる陰莖骨は、トナカイには見られない。

第2節 出土資料

(1) 遺存体 (表 27、28、図 47)

トナカイの遺存体の出土が報告されている遺跡の数は、野生トナカイが生息しているサハリンでもきわめて少なく、生息していない北海道では皆無である。

本研究で対象とする時代のうち、サハリンで遺存体が確認されているのは、(1)サハリン中部で続縄文時代前半期からオホーツク文化期前期(十和田期)の初期に併行する可能性が指摘されている「ザーパトナヤ 10 タイプ土器期」と、(2)オホーツク文化期、に限られる。両時期ともに出土量は少ないが、前者に属するサハリン中部のザーパトナヤ遺跡群と、オホーツク文化期の後・末期(東多来加期)に属する同じくサハリン中部のプロムイスロヴォエ 2 遺跡(内山 2002a、b)とを比較すると、出土獣類に占めるトナカイの最小個体数の割合は、前者が約 9.7%であるのに対して、後者では約 0.7%とより低い値を示す(前田他 2001)。なお、オホーツク文化期に属するサハリン南部の遺跡に関しては、これまでのところ、動物遺存体の定量的な分析例がないが、当該地域で戦前盛んに行われた調査についての記録の中に、「我々は現在、馴鹿が湾内長浜附近(註 1)に生棲してゐるので、貝塚からその角などが多数に出土するだらうと期待してゐたが少ない」(木村 1939: 96 頁)との記載や「鹿角は案外少ない」(馬場 1940: 32 頁)との記載を見出すことができる。なお、民族例では、トナカイの骨髄が貴重な食料資源となり、さらに、小さく砕いた骨を煮詰めることによって膠(にかわ)が作り出される事例(シートン 1925・1928 [1998])が知られることからすれば、遺跡からトナカイの骨が完形のまま出土しない可能性は高い。しかし、筆者が分析を行ったプロムイスロヴォエ 2 遺跡やザーパトナヤ 10 遺跡などの動物遺存体の中には、破片資料を含めても、トナカイの遺存体は稀であったため、遺存体で見ると、トナカイの利用は盛んでないといえる。このような出土量の少なさは、トナカイが食料資源としてだけでなく、その毛皮や角、骨が道具素材として多岐に利用できることを鑑みれば、意外な傾向ともいえる。

表27 トナカイの遺存体と製品の出土遺跡一覧(1) ザーパトナヤ10タイプ土器期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*		備考	図番号	出典
		続縄文 前併行	オホーツク併行 初 前			
-	ザーパトナヤ10		(△ / 1)	角製籠状製品(加工途中?)	図49-	2 1
-	ザーパトナヤ11		(△ / 有)	加工途中の角あり		- 2
-	ザーパトナヤ12		(△ / 有)	角を切り出された頭蓋あり		1 3
-	ドンスコエ3		(+ / 有)	加工途中の角あり		- 4

表28 トナカイの遺存体と製品の出土遺跡一覧(2) オホーツク文化期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*				備考	図番号	出典
		オホーツク						
		初	前	中	後			
1	プロムイスロヴォエ2 (東多来加貝塚)				△ / 多	角製銚頭や釣針など	図48-	1~6 1
2	多来加川左岸				(? / 1)	角製銚頭		7 2
3	オストロブノエ2				(? / 有)			- 3
4	ポストーチナヤ1				? / 有			- 4
5	ザーパトナヤ1				? / 有			- 5
6	ススヤ(鈴谷北貝塚)				(△ / 有)	トナカイ? 角製「槍」		- 6
7	南浜通2丁目				(+)			- 7
8	浜中2				- / 1	角製帯飾	図50-	8 8
9	上泊				- / 1	器種不明品		9 9
10	香深井1				- / 4	トナカイ? シカ? 角製品		10~13 10
11	亦稚				- / 2	トナカイ? 角製彫刻品	図51-	14,15 11
12	川西				- / 5	角製銚頭や有孔円盤など		16~20 12
13	トーサムボロR-1地点				- / 5	シカ? トナカイ? 角製品	図52-	21~25 13

* 遺存体欄の記号は哺乳類中の割合を示す 主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明:+、出土なし:-、出土の有無不明:?
製品欄の数字は出土点数、もしくは程度を表す
()内は、所属時期の断定が困難な資料である

No. : 図47の遺跡番号に対応

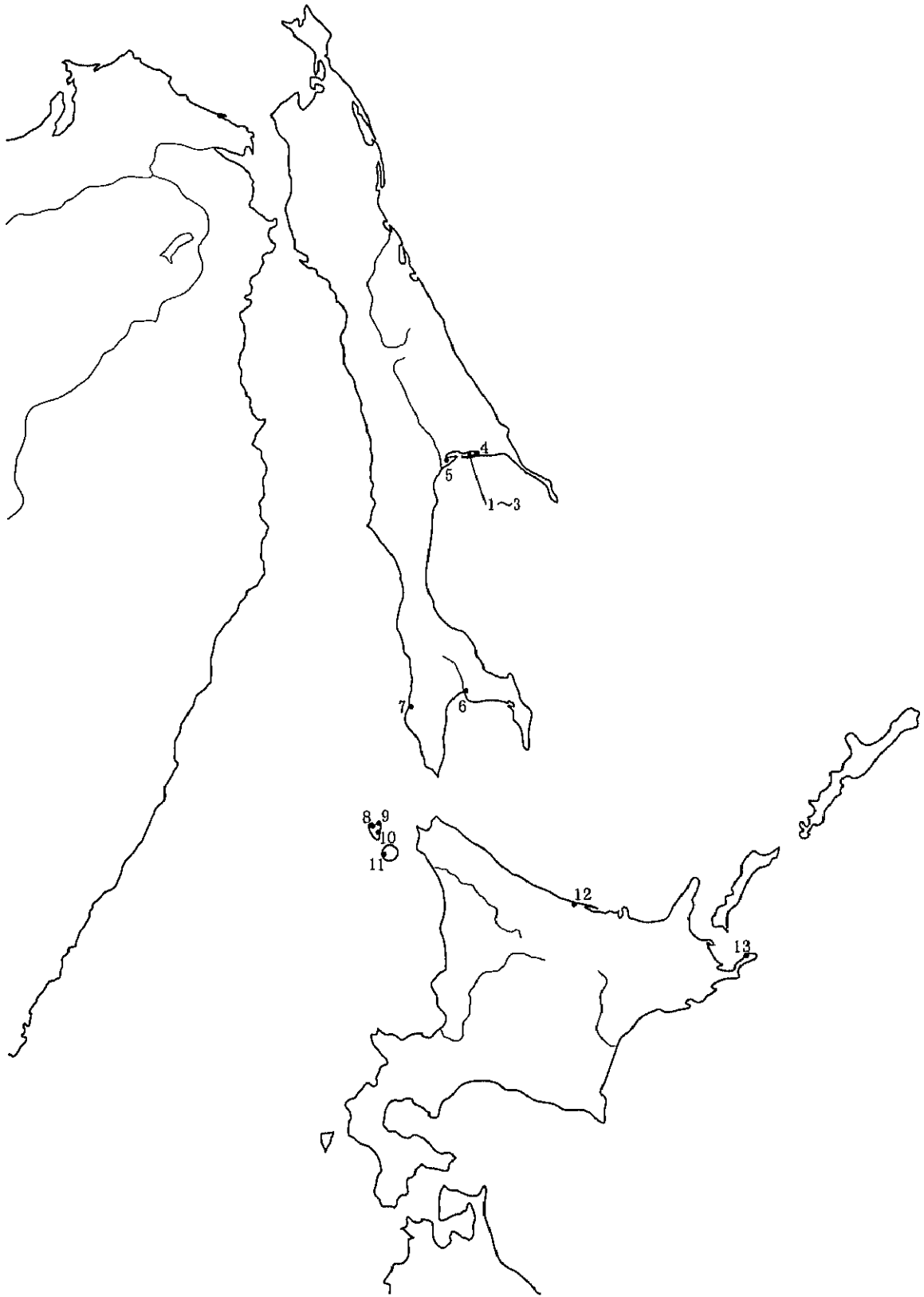


図 47 トナカイの遺存体とそれを素材とした製品の分布（オホーツク文化期）

(2) 角製品 (表 27、28、図 48、50～52)

トナカイの遺存体を素材とした製品は角製品に限られており、骨や歯牙が道具素材として利用された例はこれまでのところ知られていない。また、サハリンで出土した製品の材質鑑定があまり進んでいないこともあり、角製品が報告されている遺跡の数も少数にとどまる。

サハリン中部では、オホーツク文化期の東多来加期に属する角製品が割合多く得られており (馬場 1940、平井 1965、新岡・宇田川 1992、Федорчук 1995、1998)、道具素材として角の利用が盛んであったことがうかがえる。図 48 は、そのうちの一部を図示したものである。トナカイの角から作り出される製品には、銚頭や釣針などの生業に関わる道具類の他、柄やスプーン (実用 / 非実用品のいずれであるかは不明)、動物意匠遺物など、さまざまな器種が認められる。

プロムィスロヴォエ 2 遺跡 (東多来加貝塚) から出土した動物遺存体を同定した直良信夫氏 (1938) は、トナカイの角破片に対して頭蓋骨などの出土量が少ないことを記している。同氏は、この遺跡のトナカイの入手経路について、(1) 当時の人がシベリアからトナカイを伴った、(2) 角のみを対岸 (筆者註: 大陸側) から仰いだ、(3) 結氷した間宮海峡を経てサハリンへ渡った野生トナカイを捕えた、という可能性を挙げ、さらに、当時の人がトナカイを「半家畜」(前掲書: 21 頁) として所有していた可能性をも示唆した。なお、周辺文化でトナカイ飼養が行われていたことを示す確実な資料はまだ得られていないが、岩壁画や土器に描かれた線刻画を基に、オホーツク文化と一部併行する時期にアムール河河口部にあったテバフ文化において、トナカイ飼養が行われた可能性を指摘する見解がある (デリュージェン・コッシーナ 1999、デリュージェン・デネコ 2003)。

サハリン中部で続縄文時代前半期からオホーツク文化前期に併行する可能性が指摘されている「ザーパトナヤ 10 タイプ土器」の時期においては、角製品そのものの出土は少ないが、角が切り出された痕跡をとどめる頭蓋骨 (図 49 - 1) や加工途中とみられる角の存在 (2) から、角が製品の素材として利用されていたことは明らかである。

北海道では、6 遺跡でトナカイの角製品、もしくはその可能性のあるシカ科の角製品が確認されている (図 50 - 8～26)。いずれもオホーツク文化期中期 (刻文期) 以降に属する資料である。8 は礼文町浜中 2 遺跡 (前田・山浦 2002) で出土した帯飾り (前田 2002a,b) で、穿孔のあるアシカ類の切歯 3 点とともに出土した。後期の沈線文期に属する資料であり、大陸にある青銅製の帯金具を模したものとされる。10～13 は礼文町香深井 1 遺跡 (大場・大井編 1976) で出土したトナカイ角製の可能性のある製品で、いずれも刻文期の資料である。このうち 3 例 (11～13) が「未詳角製品」として報告されたものであり、うち 1 点 (12) では、クジラ様の浮き彫りがみられる。10 は 1 号 c 堅穴床面で出土した品であり、銚頭 (前田 C 群) の未成品とみられる。図 51 - 14、15 は利尻町亦稚貝塚 (北海道利尻町教育委員会 1978) から出土したトナカイ角製とみられる製品である。後期に属する沈線文土器と貼付浮文土器をともに含むブロック中に構築された焼骨遺構から出土したものであ

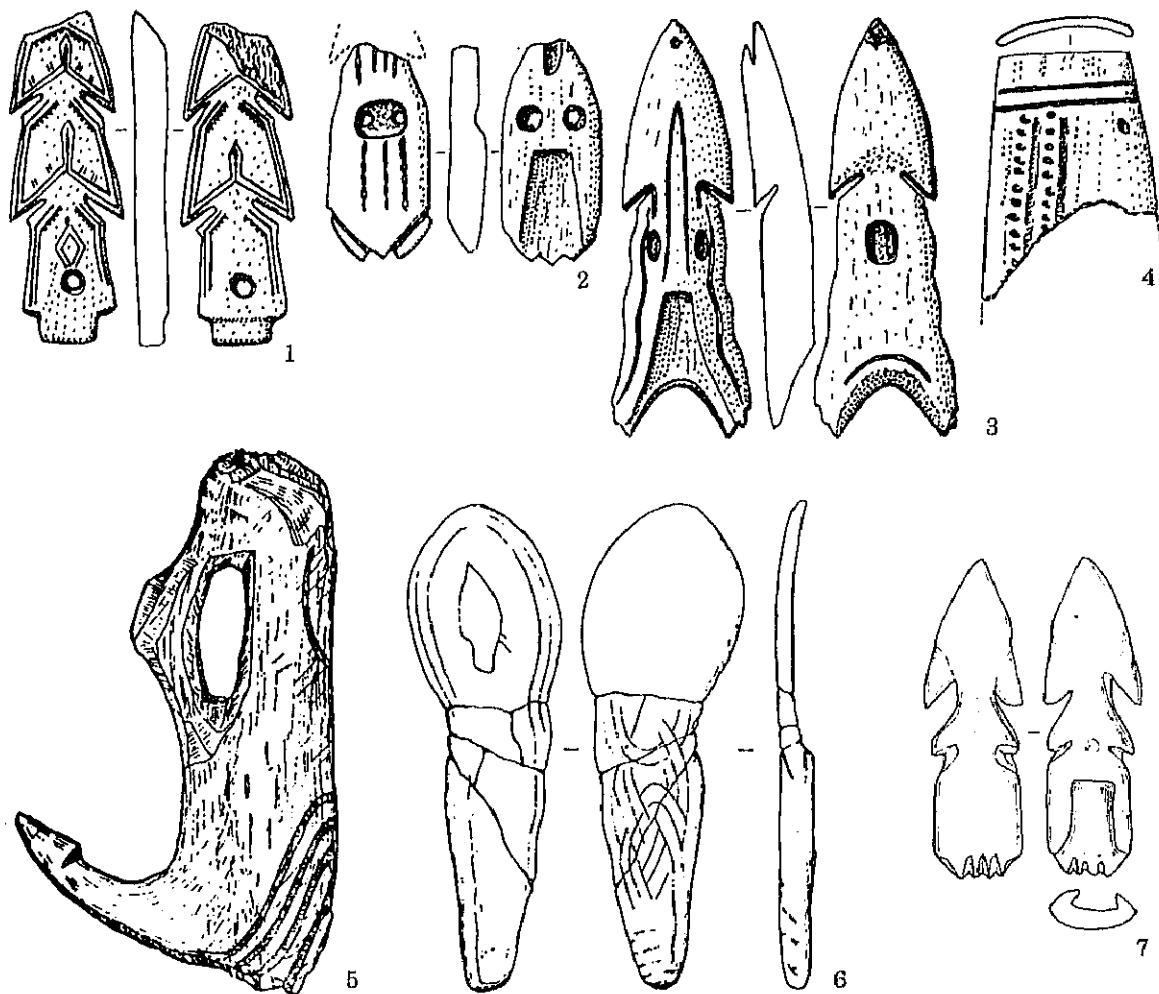


図48 トナカイもしくはその可能性のあるシカ科の角製品(1) オホーツク文化期
1~6: プロムィスロヴォエ2 (東多来加貝塚) 7: 多来加川左岸 (縮尺 1/2)

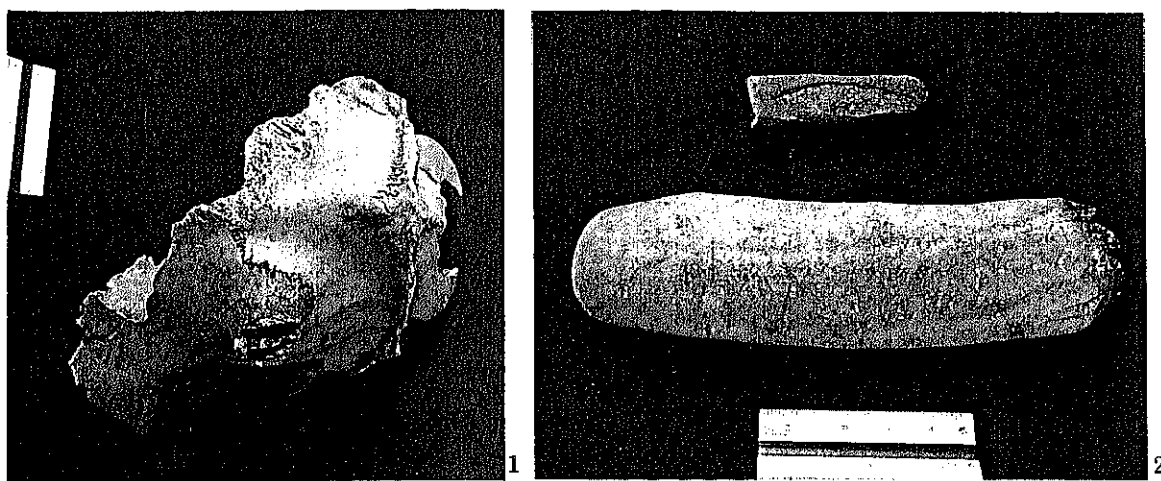


図49 角を切り出されたトナカイの頭蓋骨と角製未製品 (ザーパトナヤ 10 タイプ土器期)
1: ザーパトナヤ 12 2: ザーパトナヤ 10

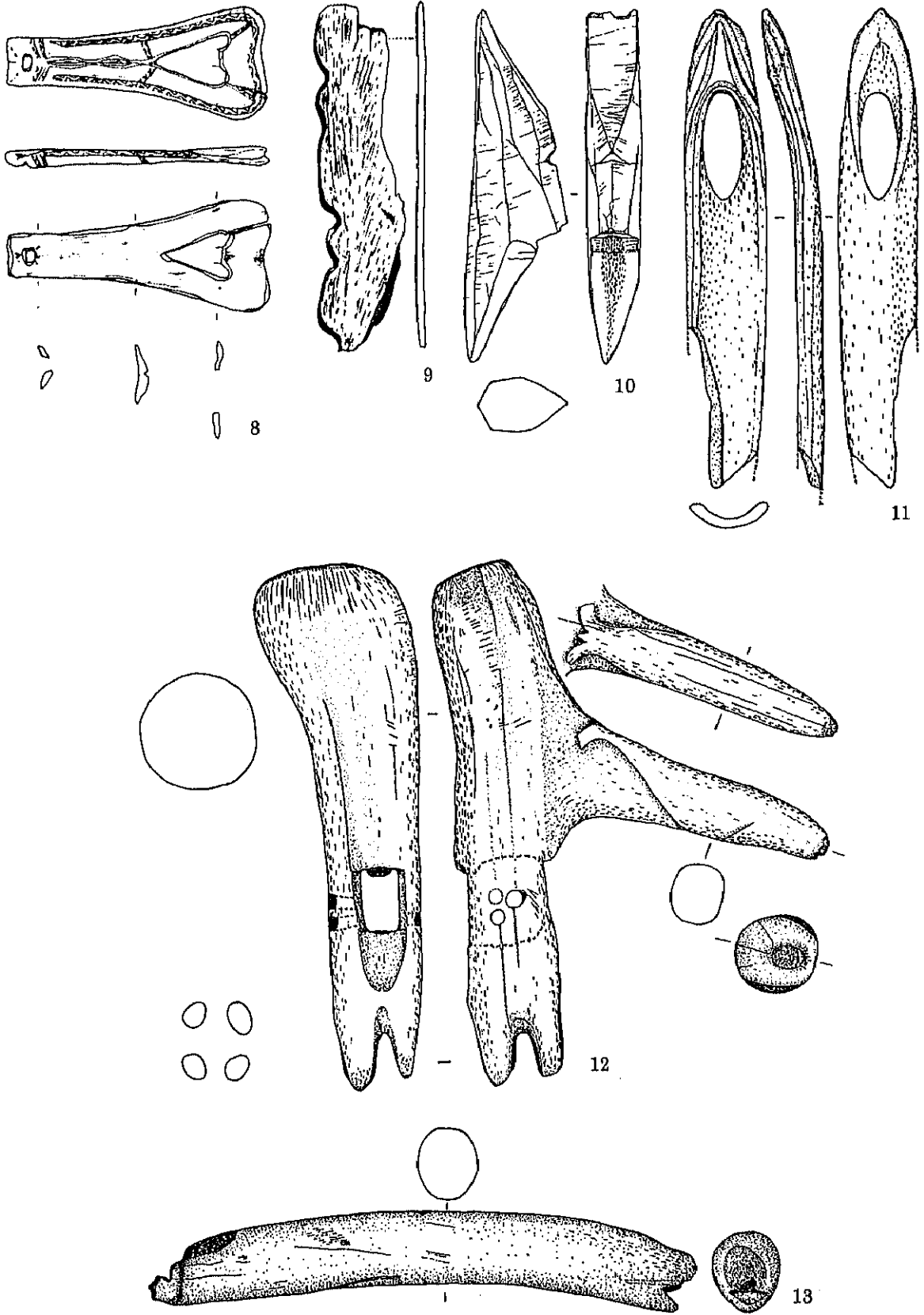


図50 トナカイもしくはその可能性のあるシカ科の角製品(2) オホーツク文化期
 8: 浜中 2 9: 上泊 10~13: 香深井 1 (縮尺 1/2)

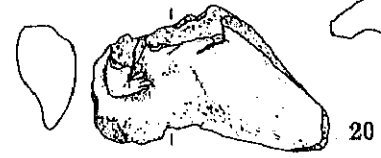
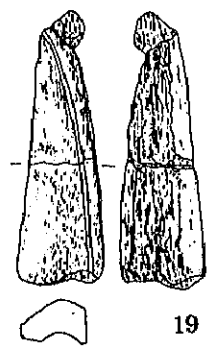
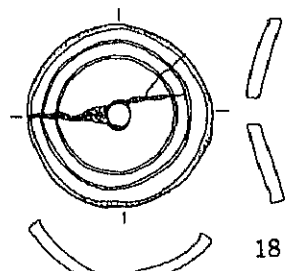
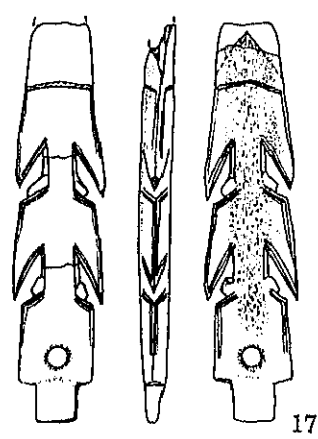
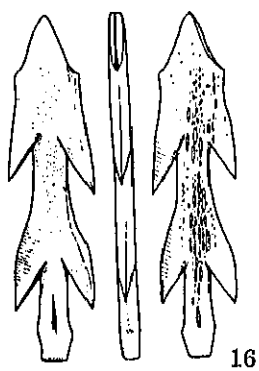
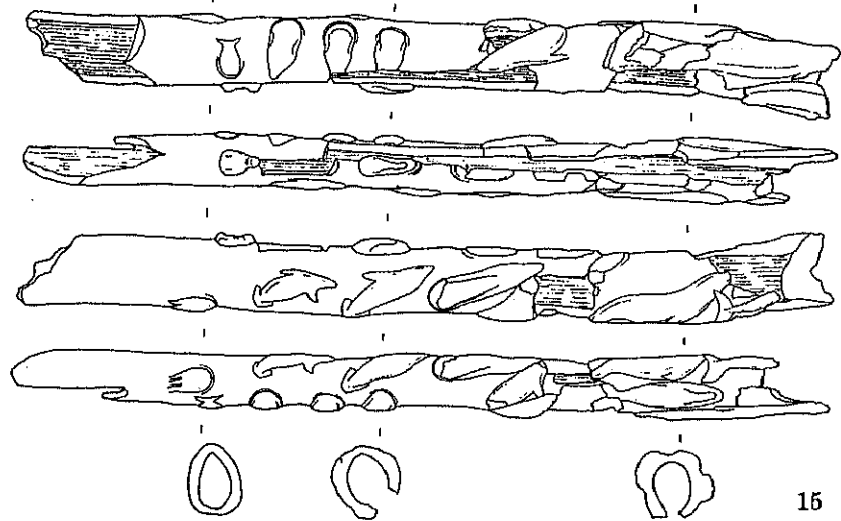
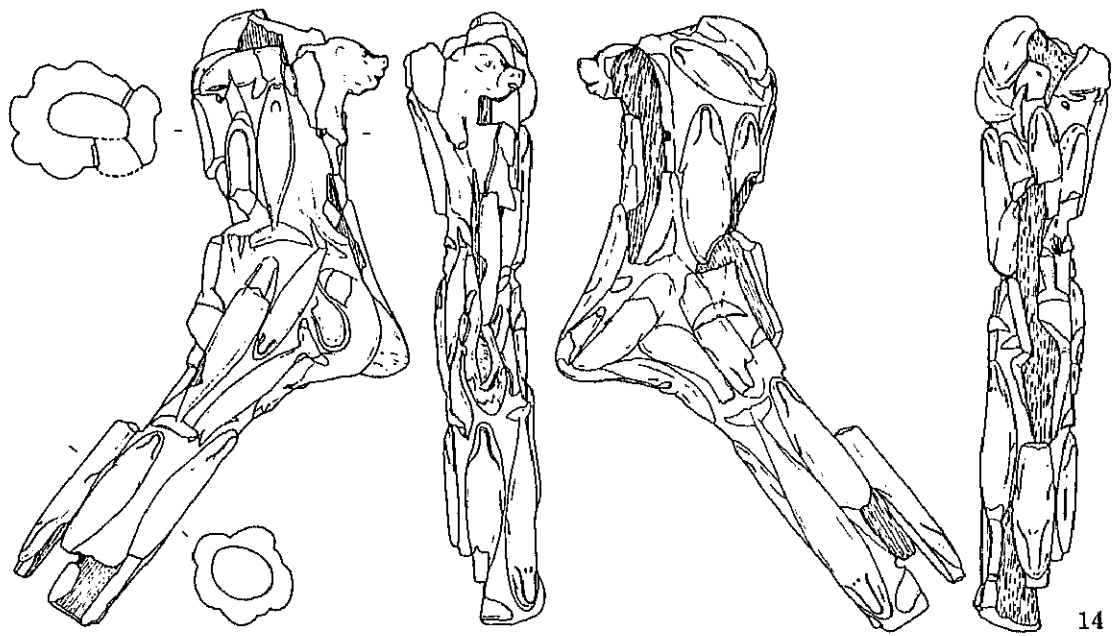


図51 トナカイもしくはその可能性のあるシカ科の角製品(3) オホーツク文化期
14,15: 亦稚 16~20: 川西 (縮尺 1/2)

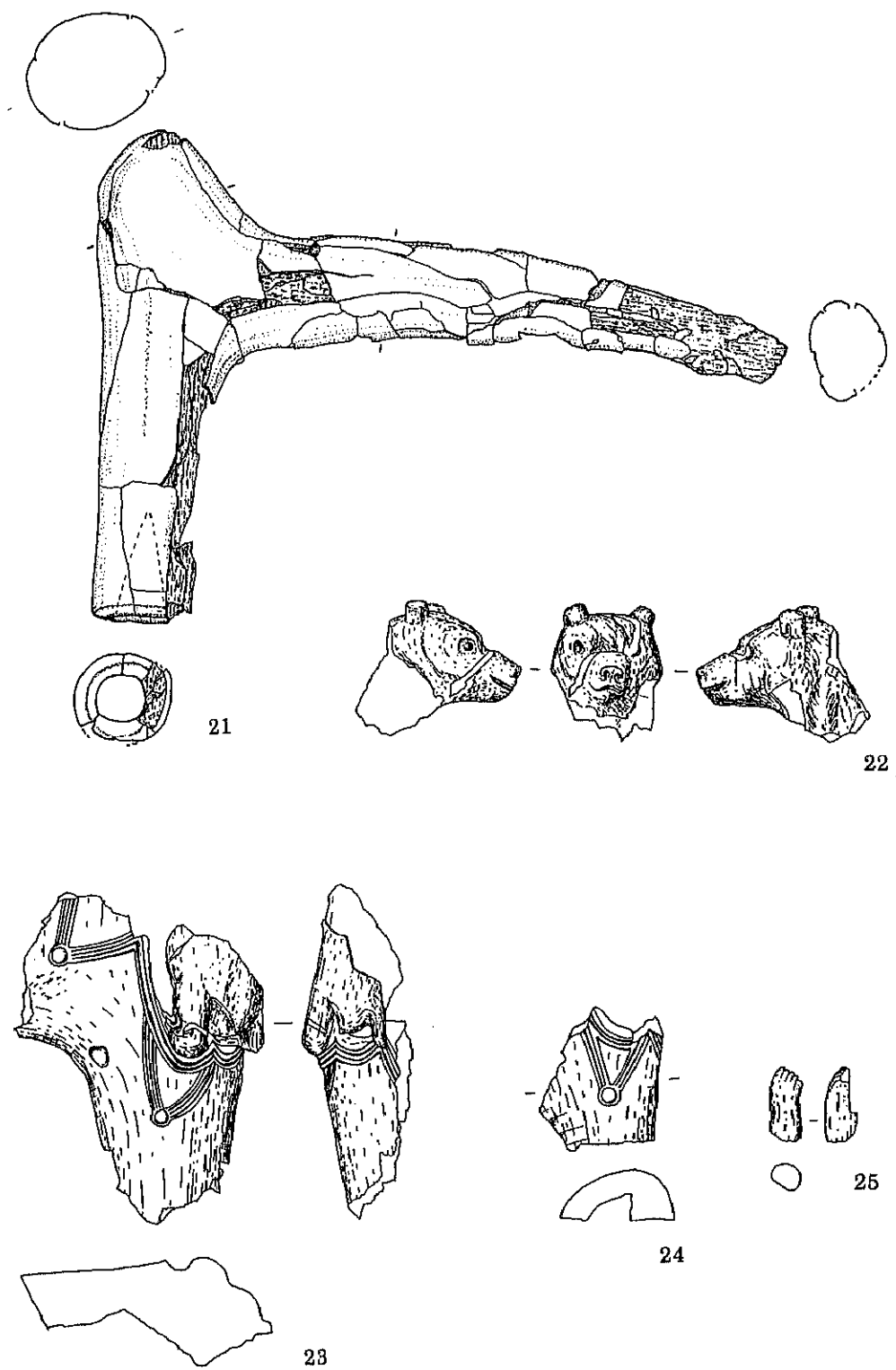


図52 トナカイもしくはその可能性のあるシカ科の角製品(4) オホーツク文化期
 21~25: トーサムポロ R-1 地点 (縮尺 1/2)

り、2点とも被熱のため、多少の変形をきたしているという。うち1点(14)では、先端部にヒグマの頭部が作出されており、体部にはクジラ様の浮き彫り25頭分を認めることができる。もう1点(15)でも多数のクジラや鯨脚類様の浮き彫りが見られる。クジラ様の浮き彫りには、ゆったりと泳いでいる姿や水に潜る様子などがあり、下顎が大きく上顎が狭いことや、背びれが見られないこと、尾びれの刻みなどの形態的特徴から、体長17mほどにもなるセミクジラを写實的に模した可能性が指摘されている(西谷2001)。湧別町川西遺跡(北海道立北方民族博物館1995)では、後期の貼付浮文期に属するトナカイ角製品が5点(16~20)確認されている。うち2点(16、17)はカエシ付・雄型の銚頭であり、カエシ2組が左右対称に作出されている。16は銚のソケット部が完成しておらず、未成品とみられている。2号竪穴床面から出土した17は、体部に線刻された模様があり、サハリン中部のプロムイスロヴォエ2遺跡から出土したトナカイ角製の銚頭(図48-1)と、形態、模様の点で類似する。根室市トーサムポロ遺跡R-1地点(北地文化研究会2004)では、貼付浮文期に属する1号竪穴より、鹿角もしくはトナカイ角製とみられる製品5点(図52-21~25)が出土している。21の資料の幹の空洞部には、円錐形の骨製品が埋め込まれていたという。22~25は、まとまって出土したものであり、本来は長さ25cmほどの逆V字形の製品であったとみられている。先端部にはクマ頭部の意匠(22)が作出されている。

北海道で出土したトナカイ角製品は出土量が少量に限られるが、北海道にはトナカイが生息していないため、角を介したサハリンとの交流を具体的に示す資料となり得る点で注目される。なお、サハリン、北海道で出土した角製品の多くは、その大きさから、成獣の雄の角を素材としたものとみられる。

(3) トナカイを模った遺物

トナカイに類した動物(註2)を模したとされる動物意匠遺物は、サハリン南部のウスチ・トンナイチャ遺跡(Шубин・Шубина1977)から出土した土器片1点(図65-6:第6章に掲載)のみである(表37:第6章に掲載)。この土器片には動物型のスタンプ文が押されており、報告者はこれを、シカ科動物もしくはジャコウジカと推定している。角らしいものはみられないため、トナカイだとすれば落角した時期(註3)の個体を表現していることになる。ただし、このような簡略な表現では、四足獣としか捉えることができず、報告者の述べるシカ科動物やジャコウジカと認定することは困難と言わざるを得ない。

以上のように、トナカイは、意匠の対象とされることが全くなかったか、もしくはきわめて稀であったといえる。

第3節 利用の程度

サハリンはトナカイの生息地域にあたるが、出土した遺存体の内容からは、どの時期に

においても、その肉や毛皮が盛んに利用された様相は見出し得なかった。

角製品は、サハリン中部を中心に出土が認められているが、雄の成獣で1mを超すトナカイの角の大きさからすれば、片側の角1本からでも割合多くの製品を作り出すことが可能である。そのため、トナカイをそれほど盛んに狩猟もしくは飼養しなくとも、製品の素材となる角は十分確保できたものとみられる。ただし、角製品の多くが雄成獣の角を素材とした可能性が高いことからすれば、トナカイの捕獲や落角の採集の際には、選択性が働いていたことが推定し得る。

トナカイを飼養して荷駄引き用や騎乗用として用いる文化（第2章で示した動物の利用内容におけるⅡ-c）では、自然死を待たずにトナカイを屠殺し、その肉や毛皮を利用するのが常である（Ⅰ-a、b、cへの転化）（トゥゴルコフ1993）。また、そのような文化では、トナカイの食料となる植物を求めて移動性に富んだ生活となり、生活物資の多くをトナカイに依存するなど、生活体系がトナカイを中心に構成されるようになる。そのため、トナカイとの関わりは他の獣類に比べようもなく深くなり、それを意匠した製品が数多く作り出されることでも知られる。本章で取り上げたトナカイ関連遺物からは、上記のような傾向は見出せず、また、サハリンや北千島で出土する骨製の櫛具（図53）が金属製櫛具を模倣したものであること（岡・馬場1938）や、その出土がオホーツク文化期よりも新しい時期に限られること（岡・馬場1938）からすれば、オホーツク文化期まではサハリンでトナカイが飼養されていなかった可能性が高い。すなわち、第2章で示した人間との相互関係においては、複数世代にわたる所有意識がなく、かつ生存状態での拘束も伴わないⅠ-a段階に位置づけられるといえよう。

第4節 角製品に見るオホーツク文化内での地域間関係と地域差

オホーツク文化期において、トナカイの角を素材とした製品が、生息圏外である北海道で出土していることは、当該期のサハリンと北海道との地域間関係を復元する上で注目される。北海道でトナカイ角製品と断定されている製品は全て、オホーツク文化期の後期（沈線文期、貼付浮文期）に属する資料である。サハリンでは、より古い時代からトナカイの角の利用が知られているが、その出土が顕著な時期は、オホーツク文化期の後・末期（東多来加期）であり、供給地であるサハリンでの利用の増加を受けて、北海道にもその移入が図られることになったのではなかろうか。北海道で出土したトナカイ角製品の中には、サハリンではこれまでのところ類例がみられない帯飾りや動物意匠遺物、有孔円盤などが含まれるため、角が未加工の状態で北海道に渡ったことが想定し得る。一方、川西遺跡（北海道立北方民族博物館1995）出土の銚頭のように、形態や模様がサハリン中部で出土した銚頭に類似した資料については、製品段階で渡った可能性や、それを模して作られた可能性を考えなくてはならない。

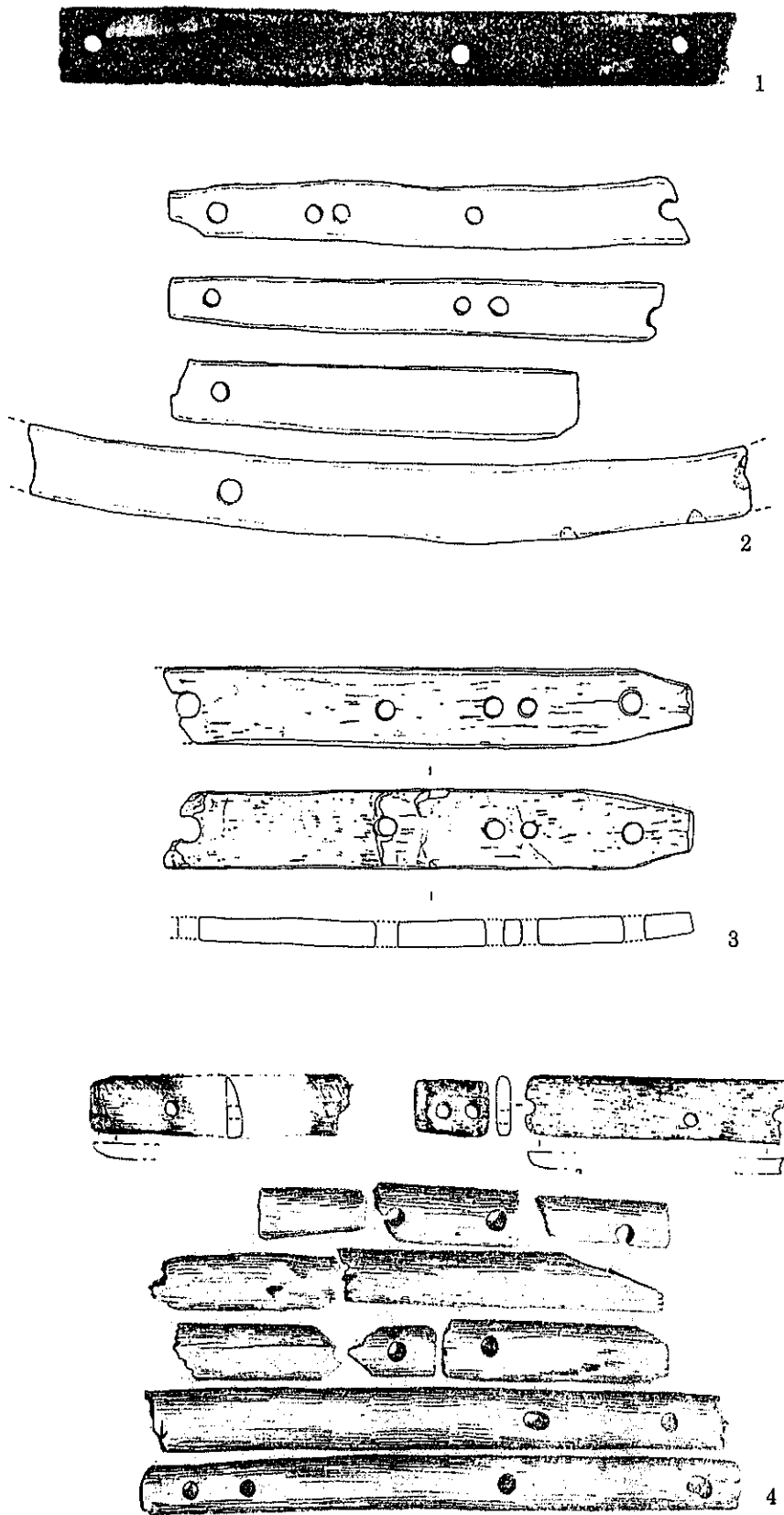


図53 骨製橋具

1: 東多来加 2: 多来加川左岸 3: オタス 4: アジョールスク (縮尺 1/3)

角製品の出土は、これまでのところ、サハリンでも中部に偏る傾向にある。出土総数が少ないために、これが普遍的な傾向であるかどうかについては検討の余地を残すが、道具素材としてのトナカイの角の位置づけに、生息圏であるサハリン内でも地域差が認められる可能性のあることは注目されよう。

註

(1)サハリン南部のアニワ湾岸の地名。

(2)サハリンの動物相の中で、トナカイに割合近い動物としては、ジャコウジカ (*Moschus moschiferus*) が挙げられる。ジャコウジカは偶蹄目ジャコウジカ科に属する動物で、雄の体高は大きいものでも 70cm 程である。雌雄ともに角を持たず、雄の老獣では、外部に突き出た大きな犬歯を特徴とする。この他に、『樺太の動物』(岡田 1942) などには掲載されていないが、サハリン在住の動物学者であるコージン氏(ユジノ・サハリンスク郷土博物館)の現生標本の中には、角が 6 つに分岐するアカシカ系の頭蓋骨標本が含まれている。一方、北海道では、偶蹄目シカ科に属するエゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*) が生息している。

(3)表 26 に示したように、トナカイが落角している時期は、雄ならば冬、雌ならば春の一時期に限られる。